

ひと

宮城・石巻で高齢社会の医療モデルづくりに挑む

むとう しんすけ
武藤 真祐 さん(41)

東京と宮城県石巻市を行き来し始めてから1年半になる。

段ボールと毛布を敷いた床の上で、お年寄りがただ、ぼうつと座っている――。昨年5月に訪れた石巻市の避難所で、そんな光景を何度も目にした。「仮設住宅に移って周りの目が届きにくくなれば心身はさらに衰える」と思った。被災した地元の病院や介護施設に受け入れる余裕はない。4カ月後、市内に在宅診療の専門クリニックを開いた。1年で約190人を診た。「ありがたい」と、笑顔を見せる患者の存在が支えた。

もとは東京大病院の循環器内科医。一時、在宅診療を担当した。

暗い団地の一室で、ほぼ寝たきりの男性がゴミに囲まれて暮らす姿

が胸に重くのしかかった。医師として社会の問題を解決したくて35歳で医局を飛び出した。外資系コンサルティング会社で約2年働き、人脈を築きながら世の中にまだないものをつくる喜びを知った。

都内で在宅医を始めた翌年、東日本大震災が発生。「車が流され買い物に行けない」「家の補修工事をしたい」。生活のあらゆる面で助けを必要とする人がいた。ボランティアや大手企業、行政とそ

のの一つ一つに伝えていった。

高齢化、人口減少、医師不足。被災地の課題は「数十年後、都市部にも押し寄せる」。石巻での実践を他の地域にも広げ、「日本を高齢社会の先進国にしたい」。

文・南宏美 写真・日吉健吾

